

2025年12月、日本中の注目が集まったひとつの裁判が結審を迎えた。

憲政史上最長の3188日にわたり日本の総理大臣を務めた安倍晋三氏を、手製の散弾銃で銃撃した山上徹也やまがみつや被告の裁判員裁判だ。

証言台に計5回立ち、弁護側、検察側、双方の質問に答えた山上被告。罪状認否で「すべて事実です」と起訴内容を認める発言をしたうえで、旧・統一教会への母親の献金や壮絶な家族関係などについて語った。幼少期から青春期に母親が信仰した宗教の影響で、極端に不安定な家庭環境で過ごした山上被告。弁護士からの「卒業アルバムの将来の夢には何と書きましたか？」という問いに、「石ころ」と答えた。その意味について「ろくなことがないだろうということですよ」と説明した。

言うまでもなく、暴力によって何かを成し遂げようとする山上被告が起こした事件は許されることではない。そのうえで、書来の夢が「石ころ」だと思わざるを得なかった背景に、親が信仰した宗教があるとすれば、言葉にできない心苦しさを感

じた人も多いと思う。

この裁判が結審する1年前の2024年12月。私たちNHK「クローズアップ現代」取材班は2025年3月18日放送「オウム真理教の子どもたち知られざる30年」の取材を進めていた。サリンという神経ガスが軍事紛争ではなく、世界で初めて現代都市の公共交通機関で使用されたテロ、地下鉄サリン事件。その発生からまもなく、30年の節目を迎えようとしていたタイミングだった。地下鉄サリン事件の前年に松本サリン事件（1994年）、さらに坂本弁護士一家殺害事件（1989年）など一連の凶悪事件を起こしていたオウム真理教。地下鉄サリン事件の直後、警視庁・長野県警・山梨県警などが合同で山梨県旧・上九一色村かみくいしきのオウム真理教の本拠地に強制捜査を実施した。一連の事件に関する裁判は16年にも及び、結果的に教祖だった麻原彰晃をはじめとする幹部13人が死刑となった。しかし、オウム真理教が起こした事件に関しては、宗教的動機の説明が不十分であるとの指摘や、今もPTSDや後遺障害などに苦しむ被害者・遺族への支援、さらに教団の後継組織による活動と監視の難しさなど、さまざまな課題が残されたままとなっている。

その中で、取材班が特に注目したのが、強制捜査の際、捜査員に保護された「ヘッドギアを装着した子どもたち」の存在だった。オウム真理教に関する報道や検証

は数多くされているが、「オウムの子」に関するものはほとんど見当たらなかった。あの子どもたちは、その後どうなったのか？ 30年の歳月をどう過ごしてきたのか？

世間では安倍元首相の銃撃事件をきっかけに、山上被告に代表されるような宗教2世の境遇に大きな関心が集まっていた。旧・統一教会の問題と単純に同一視できないものの、宗教・カルトの2世たちが抱えてきた闇に迫る取材が始まった。しかし、「オウムの子」にたどり着くのは簡単なものではなかった。1995年当時は、今以上にメディアスクラムにさらされ、当事者・関係者たちのマスコミに対する印象は決してよいものとはいえなかった。さらに、30年の時を経て、より厳しくなった個人情報保護。安倍元首相の銃撃事件により、再び過熱した宗教をめぐる報道……。取材を進めれば進めるほど、その難しさに直面した。取材班の貴重な手がかりになったのがNHK甲府放送局に眠っていた当時の膨大な関連資料だ。オウムの教団本部があった山梨県。取材拠点だった甲府放送局には、最前線で取材をしていた記者・ディレクターがまとめた取材資料が大切に保管されていたのだ。

事件や事故が起きるたびに、記者やディレクターは現場に駆けつけ速報する。ただ、災害や事件報道において、しばしばメディアの報道姿勢、あり方が批判される

ことがある。瞬間風速を競うように状況を伝えた後、継続的なフォロー、検証がなされないというものだ。そうした批判にさらされながら、実際そのような側面があることを自覚し、それでも報道の仕事が続いている私たちにとって、あのとき、「ヘッドギアを装着していた子どもたち」になんとか話を聞きたいという、その強い思いが取材の原動力になった。残された資料に再び向き合い、やっと会うことができ当事者の声には、私たちが教訓にすべきことがたくさんあった。取材の苦労が吹き飛ぶ瞬間だった。

今回、取材を担当したのは2人のディレクターと1人の記者だ。当時、甲府放送局にいた那須大暉なすだいきディレクターは、局内に眠っていた資料を掘り起こし、当事者を探し当てた。「おはよう日本」にいた谷圭菜たにかなディレクターは、日々のニュース番組の業務の合間を縫って取材を続け、今もオウムを信じているという2世の証言を伝えた。国際放送局にいた上野大和うえのやまと記者は、初任地の長野放送局時代、松本サリン事件から20年のタイミングで捜査関係者を取材。今回、再びオウムの関係者を採すため、全国を駆け回った。3人の取材者の執念が番組の実現につながったことは言うまでもない。それに加え、多くの方の協力なしに番組は成し得なかった。当時、丁寧に資料をまとめ、大切に保管したうえで、今回さまざまなアドバイスをいただいた諸

先輩方。多忙を極めるなかで、取材に協力していただいた専門家の方々。そして、自分の境遇を周囲にほとんど明かすことなく30年の歳月を過ごしてきたにもかかわらず、リスクを承知で話を聞かせていただいた当事者の方々。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。放送では伝えきれなかった部分も含めて、この本が、宗教、特にカルトに苦しみ悩む人たちの問題に向き合うきっかけになればと願う。

NHK「クローズアップ現代」取材班

目次

はじめに 1

第1章 甲府放送局に眠っていたオウム資料 11

オウムの子、30年ぶりに上九一色村へ／「歴史的な出来事」でいいのか／見落とし
ていた事実／山梨の児相に保護された53人／28年前のNHK番組／取材を困難に
する「時間の壁」／大きく変化した子どもの絵／忘れられない90日間／後世に残さ
れた記録を求めて

第2章 開示された児童相談所の記録の衝撃 41

2800点の記録を読み込む／厚生省の研究のためだった／悪臭がする第10サテ
ィアン／警察から突然の要請／いちばん長い日／ほぼ全員が「顔色不良」／風呂の湯

が真つ黒に／「カビまんじゅう」も食べていた／マインドコントロールの影響／「オウム日誌」に記された言動と人間関係／勝てなかった「甘い」誘惑／麻原逮捕のニュースを見て／全国に散った子どもの行方

第3章―オウムの子PART①

「現世」で生きていく葛藤を抱えて

89

ようやくたどり着いたオウムの子／兎相に残っていた「相談記録」／母親を名字で呼んだ／隠して捨てた「カビそば」／「破戒」をチクる「子ども班」／神のような教祖を信じて／『セーラームーン』は面白かった／オウムの世界が崩壊した日／「オウムにいたことは言っではいけない」／教義に反して荒れた中学時代／「ボア」を疑い、尊師に失望／安心した越谷のオウム道場／オウム反対の住民運動を横目に／母を困らせようと自傷／「普通」じゃなくてもいい／「オウム3世」とそしられる恐怖／宗教やスピリチュアルに近づかない／オウム幹部死刑と安倍元首相銃撃事件／一時保護されたときが0歳／被害者でもあり、加害者でもある

第4章—オウムの子PART②

妻にも子どもにもウソをつく

155

直接話す機会を待つしかない／「自宅には来ないように」／中学生でLSDを飲んだ／子どもだったから悪くない／親と断絶して人生リセット／家族にウソがバレる恐怖

第5章—オウムの子PART③

忘れられない出家生活とオウムの教義

175

今も後継団体に所属する／「充美」していたサティアン生活／「お世話係」にすぎなかった父親／サリン事件のことは「考えない」／母親に渡している教団の会費／「役に立つ」教義は信じる／教団が上で、社会は下／家族を持つイメージが描けない

第6章—出家した人生を後悔したくない

オウムの子の母

201

全財産を寄付したシングルマザー／親子の決定権は教団に／孫のおかげで脱会を決断／娘の人生を困難にしたけれど

終章―見捨てられたオウムの子の行く末

215

支援は何もなかったのか／埋もれた「厚生科学研究」／研究は秘密裏に進められた
／報告書に書かれた「宗教的虐待」／鳥取県の開示記録から／幻のカルト研究センター（仮称）／オウムの子、児相職員と再会する／今からでも支援は遅くない／「カルトの子」へのまなびし

あとがきにかえて

251

本書に登場する方々の年齢・肩書きなどは取材当時のものです。

第1章
甲府放送局に
眠っていた
オウム資料

NHK 報道局社会番組部「おはよう日本」
(当時・甲府放送局)
ディレクター
那須大暉

オウムの子、30年ぶりに上九一色村へ

雪化粧をした富士山の麓に、茶色い枯れ草が見渡す限り広がっている。

2025年2月中旬、山梨県旧・上九一色村（現・富士河口湖町）の富士ヶ嶺地区。標高1000メートルの酪農の村に春が訪れるのはまだ遠く、富士山から吹き下ろす風は冷たかった。

ここにはかつて、日本社会を震撼させた「オウム真理教」の一大拠点が置かれていた。「サティアン」と呼ばれる教団施設が点在し、教祖の麻原彰晃（松本智津夫・元死刑囚）以下、多数の信者が暮らしていた。警察だけでなくマスコミ、野次馬も詰めかけ、1995年（平成7年）当時、上九一色村、富士ヶ嶺は間違いなく、日本国民の注目の的だった。

しかし――。それから30年がたった今、オウムのことなど最初からなかったかのように、富士ヶ嶺は静けさに包まれていた。風が木を揺らす音のほかは、何も聞かえなかった。

この日、私（那須）は、ある女性の同行取材を行っていた。

30年前、「第10サティアン」で暮らしていた加奈さん（当時小学生、仮名）。児童相談



教団施設の跡地を訪れた加奈さん。(画像提供:NHK)

所に一時保護されてから初めて現地を訪ねるといので、その様子を撮影させてもらっていたのだ。加奈さんは、富士ヶ嶺に向かうロケ車の車内から、興味深そうに外の景色を眺めていた。

「富士山が大きい。外に出ていなかったから、外の景色を知らないんですよ。毒ガスを攻撃を受けていると聞かされて、外の空気を吸うなと言われていましたから。外で遊ぶこともほとんどなかったですね」

加奈さんが暮らしていた第10サティアンの跡地は、富士山に向かってまっすぐ延びる県道から分かれた、細い道の先にあった。草は背丈ほどまで伸び、一見するとただの荒地のようだ。人の気配はなかった。

車から降りて、加奈さんをサティアンの

跡地に案内するが、ここがかつて暮らした場所かどうか、彼女自身にも、すぐにはわからなかったようだ。生い茂る草の根元にかろうじてアスファルトの路面が残っていた。ここに建物があったことを示す唯一の痕跡だった。

30年ぶりに訪れた加奈さんは、当時を振り返って次のように話してくれた。

「懐かしい気もしますが、そんなに外を見た記憶があるわけじゃないので、なかなか不思議な感じです。腐った食べ物を食べたり、お風呂が週に1回だったり、本人たちに意思があったかどうかは別にして、外の世界を知らないのです、選択肢がなかったじゃないですか。今から思うと、虐待といえは虐待なのかもしれないですよね」

加奈さんは30年前、確かにこの場所で暮らしていた。

外で遊ぶことを禁じられ、粗末な食事しか与えられなかったという証言内容は、こんにち今日の私たちから見れば、明らかな虐待である。

しかし、この日の加奈さんは、不思議なほど、ひょうひょう飄々として過去を振り返っているように見えた。つらい記憶がよみがえって気分を悪くしてしまうのではないかと心配していたが、杞憂きゆうだった。つらいというよりも、むしろ子どもの頃の「思い出」をたどるかのように、持参のカメラで周囲の写真を撮っている。

一体、加奈さんはどのような人生を歩んだのだろうか。そして、教団内での教えや生活は、その後の人生にどの程度影響したのだろうか。富士ヶ嶺での加奈さんの様子にカメラを向けながら、私はそんなことを考えていた。

この日、本書のもとになった「クローズアップ現代」の本格的なロケが始まった。加奈さんを含め、児童相談所に一時保護された子どもたちが、カメラの前で自らの人生を語った内容は、SNSなどで反響を呼んだ。安倍晋三元首相の銃撃事件で注目されることになった、いわゆる「宗教2世」の問題とも重なり、多くの人の関心を集めたのだろう。親が信仰する宗教を理由に、子どもたちがその後の人生において困難に直面するという点では、同じ構図だったからだ。

しかし、取材は一筋縄ひとすじなわではいかなかった。この30年で、一時保護された子どもたちは全国各地で散り散りに大人になり、当時の公的な記録は散逸していた。児童相談所など行政機関の個人情報保護の壁も厚かった。

番組にならないかもしれない——と、くじけそうになりながらも、半年以上の取材で、かろうじて4人の子どもたちにとどり着くことができた。

彼らの人生をたどる前に、私たち取材班が、どのようにして子どもたちと接触す

ることができたのか、その経緯から書き起こしてみたい。

「歴史的な出来事」でいいのか

私がディレクターとして働くNHK甲府放送局（甲府市）は、JR甲府駅から徒歩1分、駅に直結しているともいえる便利な場所にある。2011年に建てられた3階建ての局舎は、建設から60年以上たつ渋谷の放送センターよりも洗練され、明るく開放的である。2階にある執務スペースの大きな窓からは、甲府駅を発着する特急列車「あずさ」がよく見える。

2024年2月中旬。ガタンガタンと、貨物列車が駅を通過する音が聞こえるなか、私は、当時の上司、松野志保まつのしほ副部長（チーフ・プロデューサー）に、番組制作に向けた取材の相談をしていた。

内容は、オウム真理教に関する番組を何か作りたいが、なかなか取材がうまくいかない、というものだった。

甲府放送局は、オウム真理教の拠点があった上九一色村を抱える、山梨県ローカルの放送局だ。地下鉄サリン事件から30年のタイミングに合わせて、事件を振り返

る番組を制作する必要があると考えていた。地元放送局としての責務ともいえる。それに、オウムは私にとって取り組みたい取材テーマのひとつだった。

NHKのディレクターになる前、私は九州の新聞社に勤めていた。そのときの勤務地は熊本支局だった。熊本はオウム真理教の代表・麻原彰晃こと松本智津夫の出身地である。2018年7月、麻原の死刑執行を機に、教団設立前の麻原のことを知る関係者に取材したことがあった。

県南部の八代出身だった麻原は、熊本市内の県立盲学校に進学。卒業後、鍼灸院の経営などを経て、1984年（昭和59年）に「オウム神仙の会」を設立した。その後、宗教法人の認証を受け、静岡県富士宮市や山梨県上九一色村の道場とともに、生まれ故郷の熊本県波野村（現・阿蘇市）に教団施設を建設した。ほかの地域と同様、波野村でも住民との激しい対立が生じ、90年（平成2年）10月には、国土利用計画法違反の疑いで熊本県警の強制捜査を受けた。その後、同県警の警察官が、教団に捜査情報を漏らしていたという事実も発覚した。

こうした経緯は、恥ずかしながら、2018年に取材を進めるなかで知ったことだ。

93年生生まれの私には、松本サリン事件や地下鉄サリン事件のニュースをリアルタイムで見た記憶はない。物心がついたときには、すでに麻原彰晃など教団幹部の裁判が始まっていた。オウムが起こした凶悪事件は、阪神・淡路大震災とともに90年代半ばの歴史的な出来事として認識している程度だった。

しかし、熊本に勤務しているときに、麻原の死刑執行というニュースが飛び込んできた。熊本県警の元警察官や波野村の住民、高校生時代の麻原を知る人たちに取材し、オウムは過去の遠い歴史ではなく、当事者の記憶に今も生々しく残っているのだと知った。

麻原の人物像については「学校にいたときからガキ大将のようだった」「先生の言うことを素直に聞かかわいらしい子だった」など、さまざまな声があった。また、「忘れたい」という人もいれば、記憶の風化を懸念する人もいた。

オウムをめぐる一連の事件はあまりにも巨大で、1日や2日の取材では簡単に理解することができない。そして、関わった人々の間にも、複雑で多様な感情を残していた。このときの私は、巨大で複雑なオウムの一端を見たにすぎない。

しかし、単純に歴史として忘れ去られていいのか、という思いも抱いた。公安調査庁によると、オウムの後継団体は今も存続し、新たな信者を獲得するため、若者

への勧誘が続いている。事件からかなりの時間が経過し、オウムの事件が過去のものになりつつあることで、カルト宗教に再びつけ入るすきを与えるのではないか。昔とはいえ、たった30年前の出来事である。関係者の記憶が残っているうちに、その教訓を伝えていかなければならないのではないか。

熊本では、わずかな期間しか取材ができなかったが、いずれ、時が来たら腰を据えてこのテーマに取り組もうと思った。

見落としていた事実

2021年12月、私はNHKに入り、甲府放送局への配属が決まった。生まれも育ちも九州の私にとって、山梨県には縁もゆかりもなく、どんな土地なのか、イメージはすぐにわかかなかった。ただ、あのオウム真理教が拠点を置いた「上九一色村」があることは、即座に思い浮かんだ。

着任早々、私は富士ヶ嶺に向かった。オウムが、この地にいたという痕跡に触れたいと思ったからだ。

しかし、現地を車で走り回っても、オウムのことを伝えるものは何も残されてい

なかった。かつての第2サティアンの跡地に整備された「富士ヶ嶺公園」には、慰霊碑が立っているだけだ。当時を知る関係者も高齢となり、すでに亡くなった人も多い。公民館に保管されているという、教団施設から運び出したオウム関連の資料についても活用の方策は立っていないという。

私はほかの番組取材の合間に、富士ヶ嶺に足を運び、オウム関連の記事をあさった。しかし、ここからどのようにオウムの教訓や課題を伝える番組ができるのか、取材の道筋^{みちすじ}は見えないままだった。

そして、2024年2月中旬。

私は、上司の松野副部長に取材状況を伝え、どういう切り口で、オウム関連の番組を作ることができるのか、地元の放送局として、何を伝えればいいのかを相談した。

地域局の副部長は、番組の品質管理だけではなく、経理処理や勤務管理などの事務作業に追われ、忙しい。それにもかかわらず、こんな漠然とした相談を持ちかけたことが、今となっては申し訳ない。しかし、松野副部長は私のために時間を割き^き、話を聞いてくれた。そして、次のような助言をくれた。

「オウム真理教の施設から子どもたちを児童相談所が一時保護したっていう話、知っている？ 当事者の人たちは大人になって、今どんなことを思っているんでしょうね」

私はハッとした。

オウム真理教の教団施設に子どもたちがいたという事実を見落としていたのだ。いや、はなから取材の対象にしていなかったといっているかもしれない。オウムといえば、地下鉄サリン事件や上九一色村のサティアンの空撮、麻原彰晃の公判のニュースなどの映像しか浮かばず、子どものイメージがなかったのだ。

オウムの施設から保護された子どもとは、一体どのような存在なのか、知りたいと思った。30年前に児童相談所に一時保護されたということは、彼らは今、30〜40歳前後になっているはず。その後、彼らはどのような人生を歩んだのだろうか。大人になった今なら、自分の口で、自らの体験を語ってくれるかもしれない。旧・統一教会の「2世」に注目が集まるなかで、オウムの子どもたちの証言は、カルト宗教と子どもをめぐる問題を考えるヒントになるのではないか——。取材の方向性が決まった。

オウム真理教の子どもたち

知られざる30年

NHK「クローズアップ現代」取材班

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,980円（10%税込）

発売日：2026年3月5日

ISBN：978-4-7976-7475-0

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)